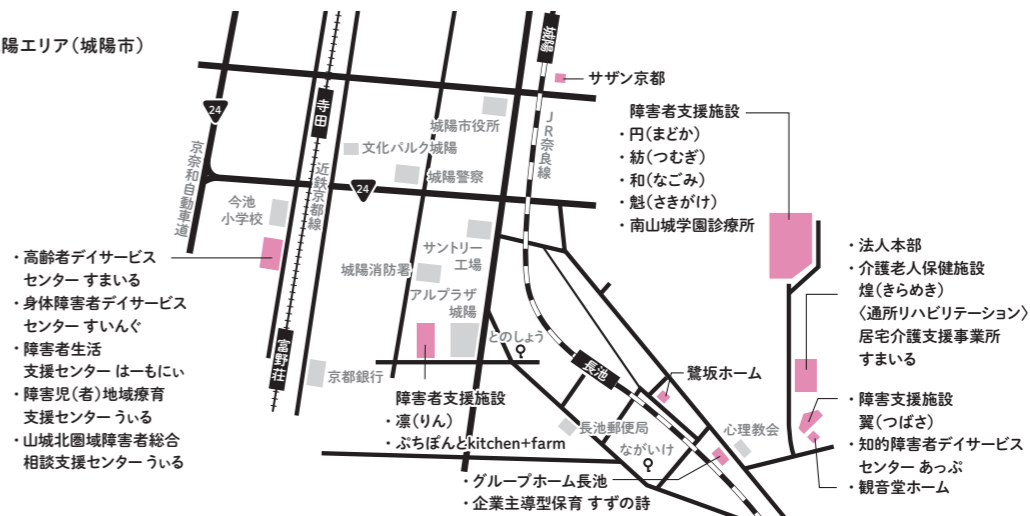




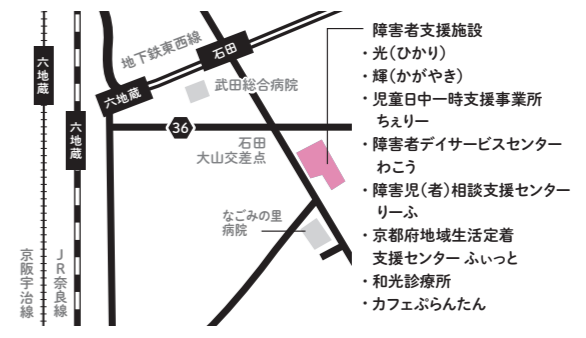
城陽エリア(城陽市)



京都市中京区・下京区エリア



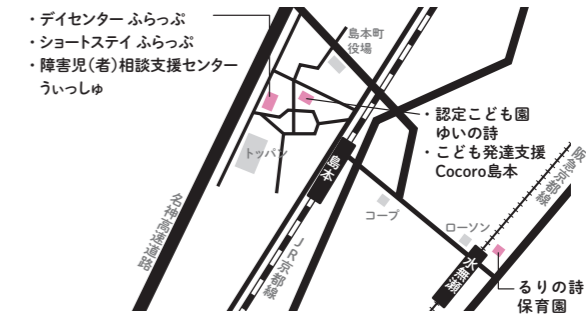
醍醐エリア(京都市伏見区)



宇治エリア(宇治市)



島本町エリア(大阪府三島郡)



編集後記

今号は「工福連携」をテーマにお送りしました。編集部でもこのテーマと向き合い、それぞれのコメントを編集後記とさせていただきます。

想像を創造に変える。想像するのは「人」であり、創造するのは「人」である。人の想像する世界が広がれば、創造される「もの」も広がっていくのだろうか。広がり無限にするKeywordが「連携」なのかもしれない。(S.I.)

人と人をつなぐテクノロジー。工福連携に想いを託し、これからの新たな連携の形がまた一つ作られようとしています。想いを実践に、実践を道に、エビデンスを携えながら確かな道を歩んできたのです。(A.S.)



特集

連携が生み出す新たな価値

スポーツ、芸術、農業など、昨今の社会福祉では、他業界とのさまざまな連携の可能性を模索しています。農業との連携は、「ノウフク（農福）連携」として互いのメリットを活かし合うことが認められ、京都府では共生社会実現を目指す「京都市農福連携」としての取り組みも。フクシと他分野を掛け合わせることで、新たな価値の創造につながると同時に、社会福祉に携わる私たち自身にも、取り組みへのワクワク感を与えてくれます。

KOUFUKU連携 ～介助ではなく、協働へ～

フクシと他業界とのさまざまな連携を模索する昨今。南山城学園では、新たな連携に挑戦しました。それは、先端技術としての工業（Technology）との連携です。工業と聞くと、福祉とは縁遠い話に聞こえたり、技術という面では介護ロボットなどをイメージするかもしれませぬ。しかし、私たちが新しく挑戦したのは、産業用ロボットと

の協働。昨年度までは想像すらしなかったことですが、今春、業界最大手の川崎重工業株式会社が開発した人共存型双腕スカロボット“duAro”を導入しました。現在では、2本の腕が水平に移動する“duAro”と障害のある人たちが、協働しながら基板センサーの製造に取り組んでいます。

最先端の工業技術と連携することで、障害のある人たちが就労困難な人たちの新しい就労モデルを開発し、低賃金問題の解決を図る。龍谷大学副学長・深尾昌峰氏の、そんな提案が“duAro”導入のきっかけとなっていました。新型コロナウイルスの影響により、就労部門の事業にダメージがあったことや、働きづらさを抱えた人たちが増え始めたこともあり、新しい就労モデルのあり方が問われていたタイミングでもありました。従来のモデ

ルから脱却し、新しい就労モデルへの転換を図るチャンスだったとも考えられます。休眠預金等活用法による助成金を財源にできたことも、“duAro”導入の後押しとなりました。

障害のある人たちが、基盤に電子センサー部品を配置する。“duAro”が、基板に配置された部品をはんだ付けする。そして、障害のある人たちが、完成した基板センサーをまとめ、納品する。お互いの長所をいかした協働作業が実現しています。

完成した基板センサーは、高齢者の安心を見守り、また、河川の氾濫やため池の安全対策に利用されます。地域社会の豊かな生活にも役立つこのプロジェクトを、「KOUFUKU（工福）連携」と名付けました。

KOUFUKU連携は、研究機関である龍谷大学、京都大学、和歌山大学、民間企業である川崎重



工業株式会社JOHANN株式会社と、社会福祉法人が連携した産学福連携。この連携は、全世界的に進むSDGsの目標を広げる契機となるでしょう。社会福祉は保険福祉分野、民間企業は経済分野という一方通行ではなく、協働によりお互いの目標が交差し、新たな分野が目標達成の視野に入っていくように。いま始まったKOUFUKU連携は、新たな価値を創造し続ける可能性に満ちあふれています。

PROJECT VOICE

協力団体の声



プラスソーシャルインベストメント株式会社 代表取締役社長

野池 雅人氏

新型コロナウイルス感染症の拡大は、それまで顕在化してなかった社会のさまざまな諸課題を浮き彫りにしてきました。その一つに、働きづらさを抱えた人たちの「はたらく」ことをどう地域的・社会的に支えていくかという課題があります。この課題の解決に向けて、南山城学園では、障がい者就労支援と産業用ロボットとの組み合わせによる「KOUFUKU連携」事業を発足。新しい取り組みはすでにはじまっており、これまでの**福祉的発想を超える挑戦**であると感じています。事業実施においては、川崎重工業株式会社やJOHNANなどの民間企業、そして龍谷大学などの学術機関とも深く連携しています。また、資金面においては、当社も関わる休眠預金を活用し、働きづらさを抱えた人たちの福祉領域のみならず、**産学金民の連携によって支える仕組み**が構築されています。今後はさらにこの仕組みを発展させることで、社会情勢に左右されない高付加価値型の仕事が南山城学園を通じて生まれること。そして、**一人でも多くの「はたらく」を支える、ひらかれた未来**に大変期待しています。



龍谷大学 ユナスソーシャルビジネスリサーチセンター

並木 州太郎氏

龍谷大学ユナスソーシャルビジネスリサーチセンターでは、研究や産学連携による事業デザインを通じて、社会課題を解決する**持続可能なモデルの開発と実装**に取り組んでいます。なかでも力を入れているのが「働く」に関する**課題解決**です。今回のプロジェクトでは、**新たな働く場を生み出そう**という南山城学園さんの熱意により、福祉分野とこれまであまり連携がされてこなかった**製造業とのコラボレーション**が実現。ロボットメーカーである川崎重工業、ロボットSierの株式会社JOHNAN、協働型ロボットの普及や安全ガイドラインについて研究する京都大学、センサー製品を開発する和歌山大学、助成団体であるプラスソーシャルインベストメントと連携し、製造業分野では初の**ロボットと障がい者が協働**するシステム導入に向けて取り組んできました。はじまったばかりの事業ですが、これまであまり作業に熱心でなかった利用者の方が、**積極的に部品の加工や組み立てに取り組んでくれた**、というエピソードも耳にしており、**可能性の大きさを実感**しているところです。より高付加価値で高単価な製品を生産することを通じた施設利用者の**工賃の上昇を目指し**、誰もが生き生き働ける場づくりのお手伝いをしていきたいと考えています。

PROJECT STORY

人とロボットの協働によって 福祉作業の高付加価値化を実現



川崎重工業株式会社 精密機械・ロボットカンパニー
ロボットディビジョン 商品企画総括部 販売戦略部

福舎 利元氏

2020年に株式会社JOHNANの京都大学寄付講座から発足した「次世代生産システム研究会」に参画。この研究会の活動により、2021年に龍谷大学ユナスソーシャルビジネスリサーチセンター（以下、YSBRC）との接点ができ、「地域で生き活きと生きていくために、**働きづらさを抱えた方々の多様な働き方をデザインする**」という趣旨に感銘を受けました。時を同じくして、弊社では「カワサキグループビジョン2030」を掲げ、**労働人口減少という社会課題をいかにロボットで補うか**、そして、潜在的な人材の社会活動をも可能にする仕組みづくりに着手。YSBRCの目指す理想像の実現に、我々の取り組みがお役に立てる非常に良い機会であると考え、連携が始まりました。

南山城学園へのロボット導入にあたり、同じ生産ラインで人とロボットが共存し、適切な作業分担によって費用対効果が出るようにしました。たとえば、高精度の必要な作業またはネジ締め、はんだ付けといった工具を使う作業はロボットに任せて、それ以外は人の手によるものとし、**完全自動化・完全無人化に**



はしないこと。人とロボットの作業を分担し、共存して生産するという考え方に基づき、YSBRCと共にロボット導入プランを検討しました。結果として、南山城学園およびYSBRCの関係者の皆さまのご尽力により、南山城学園が、プリント基板の組立という高付加価値の業務を請け負う運びとなりました。



将来の目標は、ロボットを遠隔操作することによって、**現場に行かずとも作業できる仕組み**を構築することです。たとえば、遠隔地からスマホやタブレット端末で現場状況をモニタリングできるようにして、画面上でロボット操作または作業指示を行うのです。これにより、**足腰の不自由な方や引きこもりの方であっても、ものづくりに携わることが可能**になり、結果として労働人口不足の解消の一助になっていくものと考えております。南山城学園、YSBRC、JOHNANの皆さまには、この場を借りて改めて感謝の意を表したいと思います。また、この実績が今後、より多くの方々の社会参加を推進する足掛かりになることを願っております。



子育て支援の拠点とともに、 地域みんなの居場所でありたい。

生きる。関わる。創造する。

家族みんなの居場所にも。

2022年4月、大阪府島本町に法人では初めてとなる、幼保連携型認定こども園「ゆいの詩」が産声をあげました。ゆいの詩の「ゆい」は、「つながり」。子どもたちの「やってみよう」を大切に、異年齢保育とプロジェクト保育により主体性ある教育・保育を実践し、「生きる」「関わる」「創造する」3つの力を養っています。そして、子どもが、まんなか！という言葉のもと、園と地域が互いにつながりあい、育ちあうことを目指しています。開園当初は、子どもも職員も、はじめての環境に不安がありました。子どもと職員、保護者、地域住民と共に、今日まで「ゆいの詩」をつくりあげてきました。

久しぶりに「ゆいの詩」を訪れると、園いっぱい子どもたちの声がかぎります。階段下にある隠れ家スペースに居場所を見つけた子ども。木製の家具に囲まれた部屋で集中して積み木をする子ども。子どもたち一人ひとりが、主体的に3つの力を伸ばそうとする景色が広がっていました。夕方、帰宅の時間。エントランスでは、お母さんや兄弟と一緒に絵本を読む姿を目の当たりにしました。すぐに帰らない。それも一組だけでなく、二組も三組も。「ゆいの詩」は、その子たちの場所だけではなく、家族の居場所になっていました。そんな姿をみて、ホッとした気持ちになりました。これも、子どもたちといっ

しよにつくりあげてきた「ゆいの詩」なのだと思います。

こども発達支援 Cocoro 島本。

「ゆいの詩」では、通常の保育だけではなく、病児保育や一時保育、休日保育も併設し、園の利用者に限らず広く地域の人々の幸福に貢献したいと考えています。その一つとして6月にオープンしたのが、こども発達支援 Cocoro 島本。Cocoroとは、子どもたちにとって居心地がよく (Comfortable)、地域に根差し

た (community)、空間 (room) という意味を込め、頭文字を掛け合わせて「Cocoro」としています。遊びを通じて子どもたちを理解し、保護者の子育てや発達の悩みを共有し、子どもと保護者とともに一歩ずつ歩んでいきたい。小グループによる療育活動や、関西医科大学の小児科教室と連携するという、Cocoro 島本の特徴を生かして、子どもたちの健やかな成長と、発達に悩みをもつ保護者の子育てを応援しています。

夢中になれる環境を。

島本に誕生して、もうすぐ1年になろうとしている「ゆいの詩」は、子どもたちと住民、そして職員が混ざり合って成長してきました。こうした混ざり合いで幅広く連携し、これからも島本に住む人たちの居場所になればよいと思います。子どもたちが、自分たちの居場所を見つけながら、夢中になれる環境をつくり続けていきたいと思っています。

ゆいの詩
ホームページ



Cocoro
島本ホームページ

